

新たな
連携へ

広域的連携

校友会との協力による産学連携推進

キーワード：校友会・大学OB・産学連携・情報交流・企業ニーズ

本事例の関係者

同志社大学
リエゾンオフィス、
教職員
同志社校友会大阪支部
LCC、HLC
東大阪中小企業OB
文部科学省産学官連携
コーディネーター

母校愛に満ちたOB人材の力を借りて

【要約】

同志社校友会大阪支部の産官学部会（リエゾンクローバー倶楽部LCC）による分科会「東大阪リエゾン倶楽部（HLC）」の立ち上げにあたり、コーディネーターはその準備段階から協力し、HLCの産学連携サポーターと連携して地元企業との産学連携体制づくりを進めた。地元OBから提案のあった課題は共同研究へ発展、産学連携成功例ができ上がりつつある。

【きっかけ】

同志社校友会大阪支部は「産官学活動を通じて同志社大学と社会を結びつける役割を果たしたい」との趣旨でLCCを立ち上げ、活動の一つとして東大阪地域における産学連携活動を支援する取り組みを始めることになった。

同志社大学はクリエイション・コア東大阪にサテライトオフィスを置いており、そこを拠点としてコーディネーターはLCCと協力して東大阪地域の中小企業向けに支援を行う体制を取ることにした。

【段取り・プロセス】

東大阪における産学連携活動をどのようにしたらよいかについて、LCCメンバーと3度のミーティングを持った。

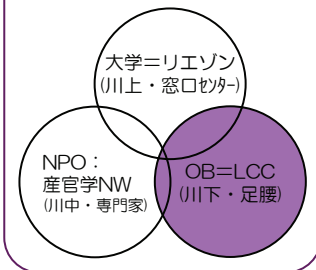
- ・平成19年9月（第1回準備委員会）：大学リエゾンオフィスの「これまでの東大阪地域における活動、連携関係について」説明。
- ・平成19年11月（第2回準備委員会）：「産学連携のメリットは？」、「技術相談から共同研究等に進んだ事例、産学連携の成功事例」について説明。今後の運営について意見交換。
- ・平成19年12月（第3回準備委員会）：東大阪地域における本学OB社長とのつながりを活かし、企業とのマッチングを目指していくHLCを立ち上げることになった。

【成果・結果や活動後の変化】

平成20年1月にHLC設立総会を開催。東大阪における産学連携を支援、中小企業を対象とした成功例、実績を紡ぎ出すことを目指してスタートした。

早速、地元OBのN氏より大学と共同して解決したい課題について提案があり、可能性のある7名の教員に相談、結果2名の教員の対応により共同研究として進めることになった。微小な部品の不具合を検査する装置に関するものであり、完成すればN氏の部品検査用に留まらずかなり広い分野での応用に発展できそうである。

三位一体運営・活動



LCCの運営・活動

HLC設立総会の 参加者

大学関係
リエゾンオフィ
ス所長始め6名
校友会大阪支部
副支部長 1名
LCC 4名
地元OB 4名
オブザーバー 1名

同志社校友会大阪支部・産官学部会「東大阪リエゾン倶楽部」が発足

東大阪は技術力の高いモノづくりの中小企業の集積地です。同志社大学リエゾンオフィスは2004年から、東大阪にあるクリエイション・コア東大阪を産学連携の拠点として入居していますが、十分に活用できていないのが実情でした。

このたび、同志社校友会大阪支部・産官学部会（同志社大学卒業生有志による産学連携サポーター組織）が新しいプロジェクトとして、「東大阪リエゾン倶楽部」を立ち上げることとなりました。東大阪近辺の企業の同志社大学OB社長が中心となり、約10名のメンバーが定期的に集まり、東大阪の企業と同志社大学の連携を回っていくことになり、1月に設立総会が開催さ

れました。活動はまだこれからですが、まずは東大阪リエゾン倶楽部の輪を広げつつ、同志社大学リエゾンオフィスと連携しながら、情報交換や企業ニーズの収集、技術相談会などを行っていく予定です。

東大阪に在住の方でこの輪に参加いただける方は、社長に限らずどなたでも歓迎ですので、ご連絡をお待ちしております。



成功の事例

OB同士のつながりと熱意が鍵に

●OBの力強い協力により課題解決が促進！

LCCメンバーにはボランティアで「産官学活動を通じて社会のため、大学のため、校友のために役立ちたい」との強い思いがあり、その熱意にはすばらしいものを感じる。また、教員（とりわけ本学卒業の教員）もOBからの依頼に対しては最優先して対応したいとの考えを持っている。これらOBの母校愛、大学を思う気持ちの強さが、今回の課題解決に大きく寄与したと言える。

●懇親会での意思疎通は効果的！

HLC定例会は2ヶ月に1回の頻度で開催しており、定例会やその後の懇親会でも、校友会のOB同士ということで自由に意見が出し合える雰囲気にある。大学に対して「大学のシーズは現場ニーズからは乖離しており、すぐに商品化できるものは少ない」、「現場ニーズが明確になれば、大学はどのような課題でも解決できるはず」、「大学の対応は非常に遅い」など厳しい言葉ももらっていたが、これらに対しても忌憚のない意見交換をすることができ、大学の立場、状況、対応などにつき理解いただけるようになった。

新たな
連携へ



東大阪サテライト
オフィス

失敗の事例

教員の多忙さにも注意したつもりであったが

●コーディネーターの対応に力みがあった？

提案のあった課題はかなり難しい内容であったこと、またHLCとして最初の案件でもあり、そのニーズに近いと思われる教員になるべく多く集まってもらうことを考えた。そして車座方式で情報、意見交換しながら解決策を見出すことを想定し、教員をあたった。7名の教員に相談、情報系教員1名（もう1名からは文章でのコメントをいただいた）と機械系教員2名の出席を取り付けた。しかし機械系教員はどうしても参加できない事態となり、最終的に情報系の教員1名に参加してもらうことになった。そして課題解決についての可能性につき情報提供してもらったが、出席した教員には対応してもらえる内容ではなかったため、結果的には出鼻をくじかれたような感じになってしまった。その後少し時間がかかったが、機械系教員2名と課題提案のN氏とで数回にわたりミーティングをもらう場を持ち、そして共同研究として進めることになった。

成功と失敗の 分かれ道

企業と大学との文化、とらえ方、時間軸などの違いを相互理解しているかが重要。その認識のもとでの行動が必要である。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

文理融合での産学官連携へ

●地域イノベーションの創出

HLCの方向性は東大阪における独自の支援とコラボレーションモデルを構築することにある。しかしまだ具体的に産学連携に進んだ例はN社との共同研究の一例しかない。今後の地域イノベーション創出には、さらなる校友会HLCの人脈の利用、協力を強めるとともに、これまでの理工系の産学官連携だけでなく社文系産学官連携も重要となってくる。今後は、文部科学省産学官連携戦略展開事業（戦略展開プログラム）の担当コーディネーターとも連携・協力して、社文系産学官連携にも取り組むこととしたい。

技術力の高いものづくり企業が集積している東大阪地域においては、特定の企業ニーズを取り上げ支援するに留まらず、社会的ニーズに対応したプロジェクトの構築も可能であろう。それに向けては、OB・文理融合での取り組みが不可欠であると考ええる。

☆コーディネーターの一言

成功事例を一つでも多くつくること、それに勝る説得力はない。また新しい事を始める場合には、成功事例をいかに早くつくり出すかである。